

2022（令和4）年度 豊橋創造大学短期大学部 外部評価及び本学の所見・対応等

■幼児教育・保育科

外部評価者：社会福祉法人 幼保連携型認定こども園 明照保育園 理事長／園長

外部評価における意見・提言等	外部評価を受けての学科の所見及び対応等
(1) 入学者の受け入れについて 評価：適切である (2) カリキュラムの内容・学修方法・学修支援・学修成果について 評価：適切である (3) 本学の教育活動全般について 評価：適切である	
(4) その他 ① 保育者を目指す地域の学生に向けてオープンキャンパスを定期的に行ったり、高等学校へ出向き養成校の学習の様子を伝え、保育への関心の高い学生を広く受け入れている。	短期大学部は一昨年より学部との合同オープンキャンパスに加えて、4月5月に短期大学部のみの「オープンキャンパス」を行っている。少子化、保育マーケットの減少等で、年々学生確保が難しくなっているが、オープンキャンパスへの教員全員参加や、高大連携、模擬（出張）授業を可能な範囲で行う中で、学生確保へ繋げて行きたいと考える。
② 理論と実践がつながるカリキュラムが充実している。地域の実習園との連携も深い。また、対面とリモートによる授業方法により、コロナ禍における学生への個別最適化も図れている。	本学は附属園を持たないが、その分、地域の園と連携を深めてきた経緯がある。園見学や授業の中での、園児の来校も定期的に行い、学生と子どもの充実したふれあいを企図するよう心掛けている。 また、過去2年間のコロナ禍でも、対面・遠隔とハイブリッドな授業方法を活用し、学生の健康状況に配慮した学習環境の構築を行うことができた。 この形式は、研修講師を行うことや、先生方が各種研修を受け学内で、学外の最新保育知見を得る一助となっている。

③ 豊橋市を中心とする地域の保育・教育資源を活かして学生の学外授業・活動も活発に行っている。それにより学生は、校内での学びを実践とつなぎ合わせ、深い学習成果を得ている。	昨年度より豊橋市との連携強化につとめ、本年よりセミナー活動等を学外で行えるようなカリキュラム構成を採用した。これにより、学生たちはご指摘のあるように、学外の保育・教育資源を利用し、実践力を身につけ、また理論の必要性にも気づける手立てとなる。今後、一連の活動をさらに発展させていきたい。
---	---

※点検項目の(1)～(3)については、すべて適切評価を頂いている。自由記述を記載いただいているので、それに対しての回答を行う。

■キャリアプランニング科

外部評価者：豊橋商工会議所 ビジネスサポートセンター長

外部評価における意見・提言等	外部評価を受けての学科の所見及び対応等
(1) 入学者の受け入れについて 評価：適切である 地元企業との密着型・実践的な活動により、定員充足率が改善されつつある。コロナ禍にあり、インターンシップの開催などに苦勞されている点が見受けられるが、今後も、さらに卒業生の活躍実績(特に地元企業との密着性など)をもっと露出させる等、入学者のアプローチに活かされるとよい。	入学者を増やすことが依然として本科の最重要テーマである。ご指摘にもあるように、地域性を活かした教育及び成果のPRは差別化要因の一部と捉えている。一方、コロナ禍による社会的な制約が職業教育の背景に大きな変化を与えている。ご指摘にあるようにインターンシップや就職活動のオンライン化などがそれにあたるが、同時に高校生の抱く将来像や社会に対するイメージ・希望も変化してきている。募集活動だけでなく、多角的な視点から、これら環境に適応する策を図りたい。
(2) カリキュラムの内容・学修方法・学修支援・学修成果について 評価：適切である ポリシーにあるとおり、社会人基礎力や勤労観などに重きをおき、実務能力の習得や地元企業とのインターンシップによる連携強化を図っており、地元雇用の安定化へも貢献している。今後、さらに地元企業との連携や地域プロジェクトへの参画に期待したい。	教育理念やカリキュラムについては、一定の評価をいただいている。地元企業との連携や地域プロジェクトへの参画を期待されているというコメントは、地域総合科学科である本科にとって、重要な評価と捉えている。上述したように、長引くコロナの影響による環境変化に適応するためには、ステイクホルダーと連携が必須である。今後一層、地元実業界との連携を強化し、教育機会や人材育成プログラムの開発において協働し、改善を図っていきたい。
(3) 3) 本学の教育活動全般について 評価：適切である 少子化の中で、短期大学の差別化が難しい中、勤労観、就業を意識し、地元企業や地域社会に役立つ実践的な教育をポリシーに掲げながら活動を行っている。今後も、さらに地元企業と地域産業の発展・振興につながる地元密着型の大学としての活動に期待したい。	四大進学傾向が強いが、本科学生のように、地域で働くことを望み、自らの適性を探りつつ、複数の職業分野の学びを求める層もいる。これまで述べたように、ポスト・コロナやウィズ・コロナと呼ばれる環境下では、求められる人材像や若者が抱く将来像も変化していると考えられる。このような状況を適切に分析し、学生指導や教育内容の改善につなげていくことが重要と思われる。現在、本科学生の学修行動調査を独自に改良・分析している。今後、このデータをもとに、学生指導を行うと共に、地元企業や地域社会での連携に際して、教育内容の改善を図っていきたい。